次の結論を得た。

1) 經皮的の「ワクチン」應用法によつても血中に相當强度の抗體凝集素)を產生せしめ得た。

2) 此の抗體產生の程度は同一菌量の皮下注射に比較して弱く最高凝集價に達する時期も亦遲い。又皮下注射に於けるよりの多量の菌液を要し、しかも抗體產生は各例により可成り大きい差がある。

3) 經皮的「ワクチン」應用に於ては殆ど副作用が認められない。(桑原抄)

腸「チフス」免疫に關する實驗的研究(V)

大江　乙彥

同　誌

著者は人體につき健康なる皮膚面、呼吸道及び直腸內に腸「チフス」菌「ワクチン」或は「チフス・ワクチン」上淸液を接種して次の結論を得た。

卽ち抗體產生の程度は 1)「ラノリン」軟膏として皮膚面より貼布 2)呼吸道より噴霧 3)直腸內接種 4)膀胱內接種の順序である。而して何れの場合も副作用を認めない。又「ワクチン」上淸を用ひた場合には「ワクチン」を用ひた場合より抗體產生が幾分可良である。(桑原抄)

大動脈黴毒の統計的觀察

奥野　勇喜

皮膚と泌尿 7卷 2號 126頁

(昭和14年4月)

著者は大動脈黴毒の統計的觀察を行ひたり卽ち發病年齡並に性との關係、發病前に行つた驅黴療法と大動脈黴毒發生との關係、性病感染年齡と潛伏期間との關係、血淸反應と大動脈黴毒との關係、大動脈變化と神經黴毒並に腦脊髓液反應との關係に就き述べたり。

「サルバルサン」副作用に就て

青島　盛

皮膚と泌尿 7卷 2號 119頁

著者は「サルバルサン」副作用例35人に就き年齡、性別、副作用の種類注射開始より副作用發現迄の時間的經過、副作用發現迄の注射回數、副作用發現時の血淸反應等を統計的に觀察し原因として中毒が可成多く、中に「アレルギー」による者も存在する事を確かめたり。

腎臟病變の全身的影響

檜原　憲章

皮膚と泌尿 第7卷 2號 154頁

著者は 1)腎病變の肝臟機能に及ぼす影響 2)偏腎病變の糖質代謝に及ぼす影響 3)偏腎病變の水分及食鹽代謝に及ぼす影響 4)偏腎病變の蛋白代謝に及ぼす影響 5)偏腎病變の電氣心働圖に及ぼす影響 6)偏腎病變の血液像に及ぼす影響 8)偏腎病變の肝臟及腎皮質の組織呼吸に及ぼす影響 9)偏腎病變の對側腎臟及肝臟に及ぼす病理組織學的影響等を臨床的に實驗的に詳細に發表し患腎の摘出は多くの場合之等の影響を好轉せしむる事を臨床的に證したり。

黴毒の診斷と治療

皆見　省吾

皮膚と泌尿 7卷 2號 169頁

著者は黴毒の診斷に就て (イ)症狀及び經過 (ロ)淋巴腺の腫脹 (ハ)「スピロヘータ・パリダ、(ニ)局所漿液の反應 (ホ)血淸反應 (ヘ)尿等の反應 (ト)「ルオテスト」、(チ)脊髓液反應、(リ)其他器官の檢査に關し所見を述べ且其治療に關し普通法、早期極量療法、「マラリア」療法、硫黃療法、蒼鉛療法を詳記し「サルバルサン」疹、抗療黴毒に就き附言されたり。

「ネオアクチバルサン」及「ミオアーセミン」を以てする皮內反應並に軟膏試驗に就て

大隈敏夫　池田次男

皮膚と泌尿 7卷 3號 P.253頁

昭和14年6月

著者は外來、入院、健康人99名に就き皮內反應、軟膏試驗を試み「ネオアクチバルサン」が「ミオアーセミン」より陽性率が高い。軟膏試驗では「ミオアーセミン」の方が陽性率高かつたと。尙晩發現象を示したものを7例に於て認めたと、因みに「ネオサルバルサン」の濃度(皮內反應としての)は 5%溶液が適當にして軟膏試驗では何れも10%が良い樣であると述べたり。